

# 博 士 学 位 論 文

## 内容の要旨および審査結果の要旨

氏名・（本籍地）	李 澤 求 (韓 国)		
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)		
学 位 記 番 号	甲第11号		
学位授与の日付	平成26年3月20日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項		
学 位 論 文 名	日韓における国家形成期の墳丘墓研究		
論 文 審 査 委 員	主 査 奈良大学 教授	坂 井 秀 弥	
	副 査 大阪府立近つ飛鳥博物館 館長	白 石 太 一 郎	
	副 査 奈良大学 准教授	豊 島 直 博	

### 【論文内容の要旨】

李澤求が提出した論文『日韓における国家形成期の墳丘墓研究』は、以下のような構成となっている。

#### 第1章 序論

##### 第1節 はじめに

##### 第2節 首長墓研究のあゆみ

#### 第2章 研究史の検討

##### 第1節 首長墓の研究

##### 第2節 研究対象と研究方法

#### 第3章 墳丘墓の定義と分布

##### 第1節 墳丘墓の定義

##### 第2節 遺跡の分布

#### 第4章 墳丘墓の分類

##### 第1節 平面形態

##### 第2節 墳丘の築造方式と拡張

##### 第3節 墳丘の盛土方法

#### 第5章 墳丘墓の分析

##### 第1節 立地

##### 第2節 墳丘

##### 第3節 埋葬施設

##### 第4節 出土遺物

## 第6章 まとめ-日韓墳丘墓の比較と変遷

### 第1節 日韓墳丘墓の比較

### 第2節 日韓墳丘墓の変遷

### 第3節 おわりに

第1章「序論」では、本論文の目的は、日本と韓国において、国家形成期とされる日本の弥生時代から古墳時代の墳墓のうち、首長勢力が築造したと判断される墳丘墓について、同じ視点により、段階的にどのように展開するかを明らかにすることとしている。そのため、韓国においては日本と共通した方形の墳丘墓が分布する西部を対象とし、日本においては韓国に近い西日本の九州・中国・近畿を対象とするとしている。

第2章「研究史の検討」では、まず第1節において、日韓における墳墓に関する研究史を整理している。日本では弥生時代の方形周溝墓の成立後に墳丘墓が現れることが注目され、墳丘墓に関する議論が活発になりその概念が整理されて研究が進んだ。一方、韓国では近年、調査事例とそれによる研究成果が増え、様々な研究が行われてきており、墳丘の平面形態、築造方法、埋葬施設の形式、副葬品などによる首長墓の時期・地域のあり方が検討され、国家形成との関係の研究が進んできている。このような研究史を踏まえて、第2節において、本論文では墳丘墓について築造方法、台状部の平面形態、埋葬施設、副葬遺物のあり方などから、その時期的・地域的な展開と国家形成との関係、さらには両国の類似性・系統性などを検討するとする。

第3章「墳丘墓の定義と分布」では、まず第1節において、日韓の墳丘墓について、盛土系と貼石系の二つに大別できるとし、盛土系には区画墓としての墳丘墓・周溝墓・方形台状墓・周溝土壙墓などが、貼石系には四隅突出型墳丘墓と方形貼石墓があるとした。従来の研究成果から、墳丘墓は方形の企画で盛土し築造して埋葬施設を設置し、徐々に巨大化する墓とまとめている。次に第2節において遺跡の分布に言及し、大半の墳丘墓は海の沿岸、川沿いの丘陵から発見されることに着目し、墳丘墓の築造集団はある程度の海上権力をもった勢力だと推定する。続けて研究対象とした遺跡と遺構について地域別に概要を述べる。日本については、九州地域は佐賀・福岡・長崎・熊本・大分・宮崎の6県、合計107遺跡、394基、中国地域は山口・島根・鳥取・広島・岡山の5県、合計120遺跡、507基、近畿地域は兵庫県・京都府の2府県、合計51遺跡433基、総計278遺跡、1334基である。韓国については京畿道・忠南・全北の各地域の合計45遺跡、446基と忠清内陸地域の合計17遺跡、258基の周溝土壙墓、総計62遺跡、731基である。日韓の合計は340遺跡、2065基に及ぶ。

第4章「墳丘墓の分類」では、まず第1節において、日本では方形基調で巨大化して前方後円墳の成立へ、韓国では方形から梯形、円形(円墳)への流れを確認している。さらに盛土系と貼石系に大別し、盛土系(日940基、韓679基)は平面を方形のⅠからⅢ形式、梯形のⅣ形式に、貼石系(総117基)は四隅突出形・方形・梯形のⅠからⅢ形式に分類した。第2節では築造方式は埋葬施設の構造、埋葬施設の追加、墳丘の拡張などによってAからE形の5類型に分類した。第2節においては墳丘内拡張(上記D形・E形)と墳丘外拡張(接続と従属)があること、第3節では西日本でみられる盛土方法が韓国でもみられることを指摘する。

第5章「墳丘墓の分析」では、集成した膨大な資料についてデータ化して分析を行っており、本論文の核をなす部分である。第1節では、日韓の墳丘墓は5基から100基ほど群集し、平地と、丘陵の頂上部・斜面平地に分布・立地することを指摘した。第2節においては墳丘墓の規模・平面形態、築造方法について、時期や立地、地域ごとに計量分析を行い、墳丘墓の系統や変化・発展のあり方を検討している。

日本の盛土系は、規模は20m以下で明確な差異はなく、最初、低地と丘陵の両方に立地し、徐々に斜面部にも築造される傾向がみられるが、貼石系は25m以内の基本形と25m以上の大型形に大別され、しかも最初から丘陵に立地するという差異を指摘している。一方、韓国の盛土系は、規模は15m・25mを境に三分され、Ⅰ・Ⅱ形式が丘陵の平坦面に、Ⅲ・Ⅳ形式は斜面部を中心に立地とする。第3節では埋葬施設について木棺と石棺にわけて検討する。埋葬施設は最初の主埋葬とそれ以降の追加埋葬があるが、木棺の主埋葬の場合、規模は、日本が韓国よりも相対的に長く、韓国のように規模に明瞭な階層差が認められない傾向がある。追加埋葬の場合、長軸290cmを境に二つに、韓国は237cmと312cmを境に三つに分けられる。追加の木棺は相対的に小さく、その差は日本では約40cm、韓国では約15cmとなる。韓国の盛土系の主木棺は他と比べ大きい特徴がある。こうしたあり方から日韓の墳丘墓は明確な意図のもと埋葬施設が造られていることがうかがえる。最後に日本の石棺(140基)は、主埋葬・追加埋葬とも長軸と長短比で三群に分けられ、木棺より規模の細分化がみられる。また規模も主と追加には約20cmの差がある。第4節では副葬遺物について検討し、非常に多様な様相であり分析は困難としながらも、弥生時代には土師器系(韓国は軟質系)土器が、古墳時代には須恵器系(韓国は硬質系)土器が使われる傾向を指摘する。

第6章「まとめ」では、これまでの分析をもとに総括する。第1節においては、日韓の墳丘墓について比較し、共に方形をしており、台状部の規模、平面形態、分布様相、築造方式、盛土方法、埋葬施設などから強い関連性を見せているとし、時には地域別の変化相をもちながらも、それぞれ首長墓として造営されたとする。第2節においては、墳丘墓の変遷について4つの段階にわけてその様相を述べ全体の総括としている。まず「Ⅰ段階」は紀元前後までで、弥生前期・中期の時期にあたる。日本海側を中心とした平地、または丘陵頂上に墳丘墓が造成される。形態は、盛土系はⅠとⅡ形式が主で一部ではⅢ形式もみられ、貼石系はⅡ形式が主に造られる。築造方式はA・B形が中心である。重複は見られず、墳丘は単独に造成される。つづく「Ⅱ段階」は紀元前後～3世紀半ばまでで、弥生後期・終末期にあたる。盛土系は尾根上を中心に分布しその範囲が広がる。貼石系の四隅突出形は丘陵頂上を中心に造られ、規模も大きくなり20m内外のものだけではなく、40mに至る西谷墳墓群のような大規模な墳丘墓も登場し盛行する。韓国では眉毛形の周溝土壙墓が登場し、盛土系は全て丘陵の頂上部に造成され、主埋葬施設は木棺が使用される例が増える。3世紀頃から多葬となり大型化し、梯形のⅣ形式が全北地方を中心に登場する。さらに「Ⅲ段階」は3世紀半ばから4世紀半ばまでで、古墳前期にあたる。日本では丘陵に集中的に造成され、盛土系の形式は変化し築造C形が発展する。中国と九州を中心に盛土系が造成される。近畿で減少するのは前方後円墳の成立との関係がうかがえる。前段階、山陰地域を中心に最大規模を達した貼石系の四隅突出形は、この時期終焉を迎え、ヤマト勢力の傘下に組み込まれた結果と推定される。韓国は数が急激に増加し、全て丘陵の頂上部に移され、一定な距離をもち単独に造成される。日本と同様に百済王権と近接している地域ではその影響が現れていると考えられる。周溝土壙墓はこの段階で消滅する。最後の「Ⅳ段階」は4世紀後半から5世紀で、古墳中期にあたる。日韓ともに墳丘墓の数が急激に減少する。埋葬施設は木棺墓が中心だが、日本では石室または石槨、韓国では石室または石槨が出現する。日本では首長墓の機能を失い前方後円墳の周囲に陪葬される墓として変化すると考えられる。韓国でも大部分の地域から消滅する。副葬遺物が百済系土器に変わり、百済の勢力下におかれた結果だと推定できる。

## 【審査内容の審査】

李澤求は韓国の全北大学で考古学を専攻し、韓国における原三国時代の墳丘墓を研究し、修士論文『韓半島中西部地域馬韓墳丘墓研究』をまとめている。その後来日し本学博士後期課程において日本語を学びながら弥生時代・古墳時代の墓制を研究し、このたび両地域を包括して比較研究する目的で本論文を作成した。

本論文は、韓国の墳丘墓研究者である請求者が、最新の調査成果を盛り込んで方形を基調とした韓国西部地域の墳丘墓についての的確に整理していることに加えて、日本各地で蓄積された弥生・古墳時代の墳丘墓に関する膨大な発掘調査資料を、合計 278 遺跡、1334 基も収集・分析した点がまず特筆される。日本の資料は専門的な日本語で記述された発掘調査報告書を正確に読み込み、詳細に分析している。しかもきわめて高い日本語能力によって正確な論述がなされていることも評価できる。

両国では最近研究者相互の交流が進み、それぞれの研究成果が共有されてきたとはいえ、これほどの成果を、同じ視点で時期ごとに墳丘墓の立地・形態・築造方法などについて概括的にまとめた意義は大きい。そして、日韓の墳丘墓の消長から、日本では前方後円墳の築造とヤマト政権の成立、韓国における百濟王権の成立などに意欲的に言及しており、それぞれの地域において同じような国家形成期の政治動向がみられることを指摘していることは重要である。

ただ、こうした成果の一方で惜しまれる点もある。日本の墳丘墓については、山陰地方で発達する四隅突出型は取り上げられているものの、円形の墳丘をもつ岡山県楯築墳丘墓や前方後円形の墳丘墓などが対象とされておらず、前方後円墳の成立前夜の動向が的確に捉えられていない点がある。日本の研究成果に学び分析の対象を方形に限定せず、さまざまなものを対象とすべきであったと考えられる。また、取り上げた墳丘墓は首長墓として認定できるとするものの、全体に一貫性に欠く点もあり、本論文における分析からはかならずしもそのように考えられないところも見受けられる。あくまでも墳丘の規模や埋葬施設、副葬品などの内容から、墳丘墓としての解釈を厳密に行うことが求められよう。

このような点があるものの、本論文は歴史的に相互に関連する韓国と日本における考古学界をつなぐうえにおいては大きな役割を果たした成果であり、こうした研究を行う請求者は今後両国の考古学研究を発展させるうえで、重要な役割を果たすことが期待される。

## 【最終試験結果の概要】

李澤求の博士学位請求にかかる最終試験については、審査委員会の主査坂井秀弥、副査の白石太一郎・豊島直博の計 3 名があたった。各審査委員は学位請求論文を熟読・検討した上で、平成 25 年 2 月 21 日、奈良大学総合研究所において博士論文審査公聴会を実施した。公聴会においては、教員 2 名、院生 2 名の参加のもと申請者による論文要旨の発表に続いて、各審査委員と申請者により質疑応答がなされた。さらにそれに続いて口述試問を実施した。その結果、李澤求が博士の学位を取得するにたる学識を有することを確認した。

## 【審査結果】

課程博士論文「日韓における国家形成期の墳丘墓研究」の審査の結果から、李澤求に博士（文学）の学位を与えることが適当と判断される。

以上